

歌集

坂道その後

柏木 志津子



平成六年一月
～
平成八年十二月

折々の花

あたらしき年のひかりに今し輝る庭の夏柑三十あまり

夢さめて夢のつづきの如くいる蠟梅の香のただよう闇に

日だまりに小さき花びら半開のはこべを摘むにしばしためらう

白粥にきざみて散らす七草のみどりさやかに喉のみどを下る

移りきて此処ここに過ぎたる四十年植えし木草の折々の花

わが庭に椿咲けるを見落とさず群れ来る目白の声する睦月

大寒の空にひびきてまた一人町内の老逝きたるを告ぐ

笹鳴き

踏み割られし道のくぼみの薄氷うすらいの亀裂するどし朝のひかりに

集積のごみに寄り来し野良犬を追えば去り行くぬれしその背せな

こころ惑いめぐる苑の一隅に木賊とくさますぐに空をさしいる

大豆屋の手造り豆腐にそえくれし雪花菜おからは帰路の掌に温かし

母と子の絆のふかさ きさらぎ七日は姑の命日夫の命日

まとめ得ず癌に逝きたり嵩なせる夫の遺筆の郷土史資料

盆地の街も春近からむ鶯の笹鳴き聞こゆ霜のあかとき

めぐみ

空高く揚がるに
いまだ幼きか川原に雲雀の声しきりなり

寄り合いてまた散りて行く
アイガモに和みていたり橋上のわれ

露の臺 菜の花 野蒜 蓬生う香に立つ春の自然のめぐみ

何となく目守まもられている心地して
草引く手止め仰ぐ庭木を

一粒もこぼさじと磨ぐ、兼業の婿が冷夏に作りたる米

外米混合なれど米ある安らぎに
四人の子らを戦後育てし

捨てかねて又しまい置くわがたづき
しみし五合一升の枡

(平成六年三月)

うつろい

木蓮は祈りの様に花を閉はやてづ疾風去りたる夕べの空に

地に還る色となりゆく散りしける白木蓮の花の片々

ひさし髪うたげの母に手引かれ桜咲く校門入りしとわの思い出

はなやげなる宴うたげにひとり黙し居つ酒の楽しみ知らず生き来し

おぼろ夜の路地ほのぼのと一すじの帯なす落花ふみて帰り来

咲きて散る花のうつろい 死は生の証あかしにあればただ祈るのみ

黄桜の坂のぼり来てかおりたつ樟もえぎの萌黄のかがやきにあう

晩春

着々と護岸工事の進められ川はやさしき岸辺うしなう

つながれて大空泳ぐ鯉のぼり燕自在にその下を飛ぶ

それぞれにやがて買われて行く苗の店頭の箱にすがしく並ぶ

てつぼう百合、三色堇、金魚草、円形花壇に楽流れいる

よろこびも嘆きもおよそ過ぎにきと藤浪ゆるる下蔭に佇つ

新緑の日々の茂りにひとりなる家居おのずと心やすらう

砂山の子らのあまた足跡のくぼみ影おき晩春の暮れ

(平成六年五月)

麦こがし

麦秋と言うもさびしまれまれに車窓をよぎる黄なる麦畠

固められ駐車場とはなりいたり稔り豊かにありし畠は

見渡す限り黄金色なす熟麦のゴッホの麦畠目裏に顕つ

人生の節目節目をかくに生き来て孫の婚礼に会う

カメラ覗く子は思うまじ病むわれの遺影とならん式服姿

待つものの無きにはあらず裏木戸を入ればおかえりと花々の声

遊び疲れ帰りしわれに声かけて母ねりくれし麦こがしの香

(平成六年六月)

生き物

迷い入り共に一夜を過ごしたる蝶放ちやる明けのひかりに

けたたましく救急車過ぐホトトギスの声を打消しわが思考断ち

つばめの巢おそう鳥を見し日よりわれは恐るる鳥の群を

親と子のかなしき形いと小さき蠅螂の子のかま振り上ぐる

三十余度の午後をいつしかまどろめる吾を起こせる四十雀の声

庭木々のそよるともせぬ熱帯夜蟬はいつくの葉蔭に眠る

伴いしイモリ一尾の死を告ぐる地球をめぐる宇宙船より

(平成六年七月)

夏の薔薇

花とぼしき炎暑の庭の朝々の底紅木槿いのちふくがに

駅頭に送りし面輪まざまざと征きて還らず 五十回忌

生前はかたみに知らぬ死者たちのひとつ墓所に並び眠れる

戦中戦後わが知らざりしこと多し生き残りひとり見入る映像

ひたすらに蝉は啼きいつ汚職まみれの政界ニュース切りし外の面に

節水を呼びかけ走る公用車真日^{まひ}てり返し坂のぼり来る

炎帝にピンクの花を捧げたり友病む庭の四季咲きの薔薇

(平成六年八月)

高原

穂に出でてうす紅のすすき輝る峠いくつを吾子と越え来し

まこと地球の小さきわれと思うなりさえぎるもの無き高原に佇ち

高原の限りもあらぬ晴天に夢のごとくに浮ける白雲

浮雲の行方は知らず高原の大地に生きて咲ける花ばな

高はらの風にゆれゆれコスモスの織りなす綾あやに陽はふりそそぐ

憂きことは互かたみに云わず母と娘と足伸べ浸る昼のいで湯に

風知草かぜに遊べり一杯のコップの水によみがえりきて

(平成六年九月)

歳月

弥生人ねむれる丘の静寂に魂よぶ如くほととぎす啼く

行き過ぎてふと振り返る遍路みち金木犀のかおりただよう

仏きざむ石工の鑿の鎚の音 一打一打のひたすらな音

幾秋の落葉の音を聞きにけり露座の仏苔生いまして

ひとり行く篁の径思わざる水引草の紅こうに逢いたり

凝こりいし思すいも直すぐ立つ竹林の径ぬくる時ふっ切れていつ

此処に過ぎし永き歳月溪流の岩それぞれの表情をもつ

サフランの花

庭に来鳴く小鳥の声を四十雀と知れど病む目にさだかに見えず

娘夫婦孫二人の声明るき家に起き伏しなごみ来る日々

局所麻酔の目におぼろげに意識する眼内レンズ今入れらるる

暗黒の眼によみがえり来る光 白内障の手術終えたり

文字読めぬ術後の時を繰る画集耳切りしゴッホの孤独の自画像

癒えて来し眼にやわらかきサフランのうす紫に地低く咲く

何事も良き方にとりお念仏唱えていたる姑頭つ秋夜

(平成六年十一月)

スイートピー

足元をたしかめ歩く老いとなり信号待つ間あおぐ蒼空

歩み疲れ寄る石の面に点々と冬日に光る雲母微粒子

四十雀はたのしくあらん群れ来たり枇杷の花から花へさえずる

一本のわが擦るマッチに忽ちに落葉は形うしないでゆく

落葉燃す火を目守りつつ連想は残生すくなき己が結末

卓上に八重の椿は落ちいたりわが寝ねし間にいのち至りて

鬱屈とわが居る日々をスイートピー伸びゆく早し寒風の中

(平成六年十二月)

寒夜の厨

節水を呼びかけ走る広報車おつごもりの空にひびきて

凧に吹きさらわれず空蟬は年を越したり椿にすがり

神の啓示の如きみくじを結うわれを雪はつぶてとなりて面打つ

わが飲食に火を点じきしガスコンロ古りしを磨くこころゆくまで

おんじきと五臓六腑をめぐりいん薬剤ありて保つうつそみ

三十種とまではいかねどこまごまとおのが作りし食に足らえる

物のおい失せたる寒の真夜の厨ひとりわれの死後のごとしも

仮寝の夢

一瞬に瓦礫となりし震災に人の営為のはかなさを知る

寒天に長蛇の列の被災者の水を求むる疲れたる顔

激震に瞬時に逝けし五千余人身につまさるる老人多きに

きさらぎの夜の冷えしるきにダンボール囲いて眠る被災者いかに

被災者の仮寝の夢に見るならむ家ありし日の団欒の様

いち早く街頭募金の若きらの声に明るき未来を信ず

生きている証のごとき一人の塵芥^{ごみ}出しに行く霜柱ふみ

残雪

足早にわれを追い越し人ら消え傘を待みの雪の坂道

あだ花は霜におのずと朽ちゆきてはや結実にむかう枇杷の木

水潜る鳩鳥も来ず渴水の遠賀の川の流るともなし

言い過ぎし一語悔いつつ帰り来し路地に俯き香る水仙

右目癒え左眼なお病み焦点の合わぬおぼろに桃咲き初めぬ

春雷に目覚めし幾度夜の明けて見放くる山の壁の残雪

画廊に見しラベンダー畑のむらさきのあわき残像 薄暮の丘は

(平成七年三月)

やすらぎ

弓なりの日本列島もろもろの災禍おおいにいま花のとき

花も葉もくれないふくみ山桜一樹もえ立つ癒えきたる眼に

「南無大師」白衣の背文字うすれたる遍路の鈴の音花群にきゆ

仏の座・金鳳花・薺・犬ふぐり・葦・蒲公英花のへんろ路

やすらぎを求めてめぐる巡礼の札所札所のみほとけの前

おとろえし姿さらさず散るさくら老いさらばえて人は生きゆく

身のめぐり片付けおかむと思いに癒えくれば又こころゆるびて

(平成七年四月)

声

春眠をむさぼるわれの老骨をゆり動かして地震ないは去りたり

びっしりと盛り上がり咲く紅つつじものを言うがに甘き香放つ

「お母さん」と呼ぶ声やさし吾子四人によりそう四人のそれぞれの声

とりとめのなき老ひとり刻々のテレビニュースに時は過ぎゆく

さびしさは口にいできてぬいぐるみの干支の兎に声かけている

花の苗植え終えし夜の雨音に疲れは身よりほぐれゆくなり

ぬばたまの闇に覚めたり又しても家路忘れてさまよえる夢

(平成七年五月)

蛍かゝ

時すぎて野路にひと夜の月見草しほむほとりを足曳き歩む

庭に鶉ひよしき鳴く日なり茫とせずしつかりせよとわれに言うがに

家籠る梅雨のあけくれ点々と枇杷西窓に色づき明かし

つゆの晴れ間を鶉も来たらず青葉若葉いたぶり止まぬ荒き風音

ポランテア老いて叶わずなりし身にふれあい弁当温きを戴く

民生委員笑顔と共に届けくれしふれあい弁当種ぐさの菜

麦稈をたくみに編みて蛍かゝ作りくれしよ姉の白き手

(平成七年六月)

牛蛙の声

切られゆく草の悲鳴と聞こゆなり炎天にひびく草刈り機の音

UV^{ユーヴァイ}カットの眼鏡をかけて通院の術後のまなこに夏日やわらぐ

夕光にほのぼのひらく合歡の花ながきひと日の小安のとき

ままごとの様にはずみて厨ごと 老の独りのまれまれなれど

あと二千日にて二十一世紀くるといふ七月十二日余命を念ず

寝ねぎ^いわに見まわす部屋の一角の黒きテレビにわが孤影あり

人の世の嘆きのごとし闇の夜の底ごもり鳴く牛蛙の声

(平成七年七月)

夕顔

浮彫りの平和の女神剥落の忠霊塔にしむ蟬の声

翅水平に支柱に静止のぎんやんま黙とう祈念終えしまなこに

耐え忍ぶこと多かりし五十年終戦の日も遙けくなりぬ

戦場のことは語らず身まかりし夫の形見の古りし飯盒

亡き夫の蔵書よみつぐ帰省の子 脳裏にその父よみがえり居む

夕顔の蒼の壁のひらきそめ照りつけし太陽落ちてゆくなり

身まかりし白き面輪のいくつともほのかに薰り夕顔ひらく

(平成七年八月)

正念場

人生の喜怒哀楽を刻みたる老いそれぞれの面輪うるわし

「むすんでひらいて」歌いつつ動かす老いの細りたる腕曲がりたる手よ

イヤリングの華やぎ知らぬわが耳朶じだを「福耳ですね」と看護婦は言う

わが鬱は飛沫と消えゆく思いきり諸手動かし物濯ぐとき

早逝の兄姉の分まで生きてわが迎えたる傘寿と思う

これからが正念場だとひとりごつ傘寿の宴果てたる夜半に

夢を見て夢に疲るることも知る老いの夢路にさまよい覚めて

(平成七年九月)

遺作展

半世紀経て開かれし遺作展大貝彌太郎わかき自画像

イーゼルに未完の海の絵 若くして病死の画家の無念は如何に

明暗はくきやかにして個性あるしぶき色調たしかなる線

三人の子・遺作二千余守り来し婦人みたりつつましく笑顔にて謝す

赤色の少なかりし絵思い出づ光芒うせて没む夕陽に

もの言わぬ花の命と向き合いて絵筆をにぎる秋のひかりに

描きなずみ描きあぐねわが注ぎたる視線いくたび花おとろえぬ

(平成七年十月)

朱実

間引く手のしぼしとまどう朝露にもろ葉こぞりてきおう春菊

百日草百日なおも咲きつぎて夏から秋へわが老い深む

もみじしてまろ葉散ゆく山萩のしだれし枝にむすぶ小さき実

静かなる小春日の庭やぶこうじの吊るす朱実あけみに木もれ陽及ぶ

まれまれのわが庭仕事ふき出でて額たるる汗からきその汗

落葉まろぶ坂道下る○脚のわが影法師のおぼつかなさや

役立たずなる時近しあえぐがに音をたているこの冷蔵庫も

(平成七年十一月)

一念

小春日の札所をめぐる峡の道散華のごとく紅葉はららぐ

石段いしきだの急勾配をのぼりたるあまた遍路の跡をふみ行く

静かなる時の流れに苔生いし石の仏につわぶきの花

天つ日を御身にあびて篠栗の涅槃の釈迦の安けきみすがた

一念の称名の声きれぎれに不動の行者にしぶく滝水

わが手引き札所たどりし今日を娘は思い出づるやわが亡き後に

おだやかに余生送らな 極月の風にしたがうしろき穂すすき

(平成七年十二月)

臘梅

またひとせ力賜えと龍王の山に向かいて深く息吸う

初春の庭に黄金こがねにかがやきて夏柑あまた充実を垂る

母さんも惚け初めしかと子の電話 自じが名忘れし賀状つきしと

うす紅の花びら餅をいただきつつ戦知らぬ子らのほほ笑み

寒の畦に小さき花を咲かせいるなずな見しより足どりかろし

あるじ
主なき書齋あるじに生けし臘梅の苔はじけてその香満ちいつ

寒風に古家鳴る真夜住みつきて久しき守宮やもりいづくにひそむ

三色堇

はりつめし霜朝の大気やわらかに押しひらきくる山鳩の声

いつしかに傘を杖として歩みいつ氷雨あがりし巷にわれは

雪もよいの空となりたりクロツカスの黄花夕べを待たず閉じゆく

煩雑なわが住む街を白銀の風景としぬ雪は一夜に

何事もなかりし如くつやめけり三色堇雪とけゆけば

長き橋足曳き渡る川原に高くは飛ばず初ひばり鳴く

晩年は幸せと言う占いを信じ生き来て八十路となりぬ

(平成八年二月)

浅春

在るがまま路傍に咲きみちイヌフグリ春のよろこびささやく如し

沈丁花香に咲きいでぬ挿木して逝きたる夫の年々の花

点々と花さきそめし雪柳をいたぶり止まず春の疾風は

はやて

如月のきよき光のおよぶ部屋立居にすがるわれの手のあと

足曳きて横断歩道わたり行く 待つ運転手を意識しながら

のっぺらぼうのマネキンが着る春の服目鼻あらざる故の華やぎ

洗剤より生れしあ小さなシャボン玉春の厨にしばしたゆとう

(平成八年三月)

くり返し高鳴き友呼ぶ小綬鶉の声に盆地の濃霧はれゆく

春雨のひと日ひと日にうるおえる庭木のもとの苔のふくらみ

ほしいまま花から花へ鶉の啄ついばみちらすはなこぼれくる

時惜しむ花の命かぬばたまの夜も仄かに咲きつぐさくら

「生涯は一度落花はしきりなり」あすか朱鳥の句碑に今年のさくら

坂道に散りしくさくら折りふしの風に舞い立つ地吹雪のごと

あと幾年この花を見るわれならん共に老いたる露地の桜木

揺り椅子

朝なさな掃く春落葉もつこくの軒越すまでに過ぎし歲月

庭畑に摘み来て朝餉のさやえんどう香氣さやかに口にひろがる

藤房のゆれの間に間にこぼれくる音なき花に時の過ぎゆく

手拍子を取りつつ唄う茶摘み歌しわ深き面かがやきてくる

疲れ易き老い身ゆだぬる揺り椅子に小鳥の声は眠りにさそう

測候所ついに閉鎖か向う丘に夜々ならびいし明りはあらず

歌らしく言葉飾らむとしていたる吾に気付きぬ寝ねがたき真夜

(平成八年五月)

くじゅうの旅

カッコーカッコー閑古鳥なく声に覚む物音あらぬ峡のあかとき

阿蘇五岳、九重連山わが視野に大観峰の頂に立つ

とび一羽水張田ひかる阿蘇谷の上を悠然とめぐり去りたり

国の秀と久住山たたえし白秋の歌碑仰ぎ読む雨降り峠に

高原のあら草なかに幾代経しハルリンドウの小さき空いろ

親子とう類型のからだ露天湯にならべ癒えゆく旅のつかれは

清流を翔ちし螢は山峡のきらめく星夜にまぎれ行きたり

(平成八年六月)

つゆ

さみだれの音絶えぬ日も刻くれば鳴き出づるなり軒の雀ら

濃淡のグレーの形さまざまに塔の上行く雲足速し

夕闇のまだきにその葉閉じゆきし合歓の紅花に雨降りそそぐ

雨季に咲く花のあわれさやわかき合歓の落花は泥にまみるる

降りつづく雨に古家にはい出づるナメクジさえも殺せぬ日あり

夏柑のマーマレードになる過程ひとりたのしむ雨にこもりて

フロントガラス叩く雨音はげしきに言葉とぎれて言いそびれたる

(平成八年七月)

生

薄明の庭にほのかに開きゆく白き木槿のひとひのいのち

この庭に生きし歲月われ知らずぬけがら残し翔ちたる蝉よ

炎天に紫陽花のいろ錆びゆきてなお球形を保てるあわれ

庭木見上げ剪定の枝さだめいる子の表情に亡夫の重なる

今し没る山の夕日に面そめて黙し見ている帰省の親子

白じろとサビタの花は咲きいたり墓参にいそぐ野峠越えに

精霊と一夜すごせし白百合の荅ほころび馥郁とあり

(平成八年八月)

馬追い

畦道をたどる老い身に生氣わく花穂いでたる早稲わせの香りに

定命のみじかき蟬のむくろあり晩夏の光に腹部さらして

書に倦みていで来し庭畑たちまちにバツタ三匹わが手に果てつ

痛む足はげまし励まし通院の道辺にきょうの葦の白花

塀越しにささやき交す花かともわがやと隣の芙蓉ゆれつつ

待つとゆう老のたのしみ種ぐさの春咲く花の球根を埋む

隙間もる冷氣にさめし暁の畳にひとつ馬追いのかげ

(平成八年九月)

去る日まで

程ほどの幸せなりしと思いつつ木犀もくせいかおる庭の草抜く

無粋なる空缶ひとつしだれ咲く萩群の間にひかりを放つ

若きらのスニーカーの足つぎつぎに吾を追い越し坂下り行く

声をかくるをしばしたためらう愛犬と常ありし友の杖つく姿

たかぶれば血圧あがる当然をこころ平らかに保てぬかわれ

二十年すでに過ぎたり亡き夫の蔵書読まんと気負いたりしが

去る日まで動いて欲しい薬ぬりマッサージする変形の足

(平成八年十月)

声

政治不信さあれかにかくに投票し学校苑のコスモスの中

舞い来たりわが身にふれし银杏落葉かりそめならぬ思いに拾う

カマキリの鎌ふり上ぐる力失せ枯葉の色にまぎるるあわれ

木斛もっしやくの枝から枝へ群れ遊ぶ小雀こがらの声の透る小春日

しばし待つ受話器に伝い来 てきばきと客に応答する吾子の声

「おかえり」の声なつかしく聞きいたり吾には遠き日々の思い出

調子よくもの刻むことも今はなしひとりの厨なべてひそけく

(平成八年十一月)

歳行く

住み古りし平屋を圧しとどろけり雷鳴三たびしぐれの夜更け

天よりの人界浄むる塩かともさざめ雪ふる音たてて降る

障子の引き手に張らんと拾う楓葉の千の落葉に千のいろどり

指先にこめし力の伝いくるわが頭ずを洗う若き美容師

明滅の電飾あかし病む人のあまた臥している病院の庭

死は常にとり合わせにあることを改めて知る急死の報に

説明歌、日常詠をぬけ切れぬままに終わるか歳行く早し

(平成八年十二月)